

カナダ大使館では、七一年度トロント映画祭で最優秀長編映画賞をはじめ、監督、脚本、主演男優、主演女優、映画音楽などの各部門で最優秀賞に輝いたクロード・ジュトラ監督「アントワーヌ伯父さん」と、カナダの作家W・O・ミッチェルの原作を映画化し、これまた七七年パリ国際映画祭でグランプリをとったアラ・キング監督「誰が風を見たか」の日本語スーパードをこのほど完成、日本各地で映画会を開いている。これを機会に、これら二本のカナダ映画の背景となった時代のカナダ社会について、東京大学の平野教授に解説していただいた。

二つの カナダ映画をめぐる 若干の感想

平野 敬一

最近、クロード・ジュトラ監督の「アントワーヌ伯父さん」（一九七一年）、アラ・キング監督の「誰が風を見たか」（一九七七年）という、それぞれ仏系カナダと英系カナダを代表する二人の映画監督の秀作を続けて観る機会をえて、深い感銘を受けた。

「アントワーヌ伯父さん」は仏系カナダ（一九四〇年代のケベック）を扱ったフランス語の作品、「誰が風を見たか」は英系カナダ（一九三〇年代の平原州）を描いた英語の作品で、対象も雰囲気もかなり違うが、この二つの作品の間には、不思議な共通性もあり、観ていると、つい比較対照もしてみたくなる。

いちばん目立つ共通点は、どちらの作品においても子供の目を通してみた大人の世界が描かれている、という点であろう。もっとも、子供といっても「アントワーヌ伯父さん」の主演プロワは、大人の世界へ懸命に背伸びをしているませた十五、六歳の少年。一方「誰が風を見たか」の主演ブライアンはまだ十歳そこそこの本当の子供である。プロワ少年がみるのは大人の愛欲と虚偽がのたうつ世界。映画は厳しいケベックの冬の自然を背景に、生々しい人間模様をくりひろげる。一方、ブライアン少年の場合は、大人の世界のどろどろとした人間模様より、カナダ大平原の自然との交流の方にむしろ重点が



ブノワ少年とアントワーヌ伯父

あり、映画は果てしなく広がるプレーリーを背景に一篇の抒情詩のように展開する。ここでは映画の筋立ての紹介は省きそれぞれ数々の国際的榮譽を受けたこの二本のカナダ映画の名作の背景について、若干の補足的説明をして映画鑑賞の一助にしたいと思う。

「アントワーヌ伯父さん」

「アントワーヌ伯父さん」の舞台は、一九四〇年代のケベックの鉦山町。映画のロケ地はケベック州ブラック・レーク附近にテッドフォード・マインズというアスベストの大採鉱地があり、少し離れた所に一九四九年に長期の大争議で天下に名を轟かせた、その名前からしてアス

ベストとなった町もある。アスベスト採鉱はケベックのいわば基幹産業のひとつであり、多くの仏系カナダ人の生活がそれにかかっているのだが、それだけにケベック特有の問題を多く抱えている。この映画にも直接間接にそういう問題が顔を出してくるのは避け難い。ひとつは言語の問題。映画の開幕早々、鉦夫ジョス・ブーラン（仏系）は上役（英

系）と衝突してそのまま会社を飛び出し、妻子を残してこの地を去る。鉦夫をやめ、こんどは出稼ぎの樵になるのである。けんかの発端は、些細なことだが、英語を解さないジョスとフランス語を解さない上役との間には、所詮、意思の疎通が成り立つはずはなかった。言語の不通からくる英仏両系間の断絶（いわゆる「二つの孤独」）の問題は、英系がまだ社会の重要な地位をほとんど押さえていたこの時代のケベックでは、特に深刻だった。ジョス・ブーランが鉦山を去ったのは、言葉の問題やそれからむ自尊心の問題もあつたろうが、鉦山における労働条件の悪さもあずかっていたに違いない。辞めるに惜しいほどの待遇を、彼はこのアスベスト鉦山で受けているはずはなかった。

この映画の時代設定は、前述したように漠然と一九四〇年代となっているだけで、こまかく明示されていないが、画面に出てくる例えばトイレの落書きなどから、第二次デュプレッシー時代（一九四四―一九五九年）の話であるという見当がつく。ケベック州首相としてのデュプレッシーは、人心収攬の術にこそ長けてはいたが、そのやりかたは、さながら独裁君主、特にその労働政策は反動の極をいくもので、組合化の芽を摘み、弾圧することに異常なほど執心し、強い使命感をすら抱いていた。ケベックの鉦山労働者は、カナダの他州の組織労働者に比べると、格段に悪い労働条件のもとで働かされていた。労働者の生活上の強い欲求とデ